

画像診断検査数が増加

やまなし

医療最前線

《 128 》

県立中央病院から

適切な診断のために欠かせないコンピューター断層撮影装置（CT）や磁気共鳴画像装置（MRI）。コンピューターの精度向上や撮影技術の進歩によって画像診断検査数が増加の一途をたどっている。県立中央病院は2009年から、高額な大型装置の整備が難しい開業医からの検査依頼にも対応。病診連携によって最新技術を生かした画像診断を共有している。

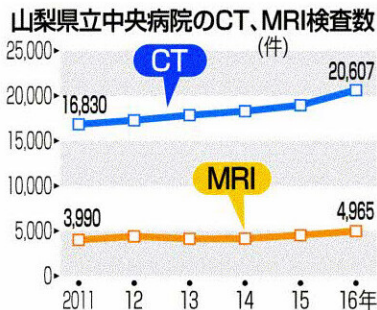
放射線部統括副部長の遠山

敬司医師によると、2次救急日や救命救急センターへの搬



放射線部統括副部長
遠山 敬司医師

開業医の依頼にも対応



同病院は09年7月から、かかりつけ医との連携に取り組む地域連携センターが窓口と

送件数の増加に伴い、時間外の検査件数が増加。中でもCT検査数は11年1万6830件から16年2万607件と右肩上がりが増え続けている。CTは十数秒で1ミリ以下の薄い輪切りの全身画像を撮影できることや、MRIの技術向上によって患者1人当たりの画像枚数、画像データが増加。3次元（3D）画像処理ソフトを用いた3D画像作成や解析データのニーズも高まっているという。

なり、診療所からのCT、MRIの撮影受け入れを開始。患者は外来を経由することなく撮影日に合わせて来院するだけでよくなった。撮影した画像は放射線診断医が分析し、読影リポートをほぼすべて当日中に作成。同センターを通じて紹介元のかかりつけ医に送っている。地域連携による15年の検査数はCT46件、MRI56件と、いずれも09年から倍増。かかりつけ医からの画像検査・診断のみの紹介も定着しつつある。

現状ではCDやDVDを紹介しているが、やりとりが行われているが、今後、病院間でネットワークを構築し、画像連携を行おうとする日本放射線医学会の計画もあるという。

遠山医師は「病診連携を進め、地域の医療資源を存分に活用してほしい。放射線診断の進歩は目まぐるしいが、現場の期待に応えられるよう研さんを積んでいきたい」と話している。

第2、4木曜日に掲載します